

## 飼葉桶のキリスト

ルカ 2 章 1～7 節

はじめに

本日はクリスマス礼拝です。**25**日でなくてよいのかと思われる方がおられるかもしれませんが、問題ありません。**3**世紀まで**12**月**25**日はクリスマスではありませんでした。そもそもキリストの誕生を祝うクリスマスという日もありませんでした。イースターはユダヤの過越祭、そしてキリストの復活に基づいて、最初から春分の後の最初の満月の後の最初の日曜日です。しかし、キリストの誕生を祝う日は、古代の教会にはありませんでした。やがてキリストの顕現、エピファニーと言いますが、イエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けたことを中心に、キリストがこの世に来られたことを祝う日、公現日が設けられます。これは**1**月**6**日でした。

やがてローマでは顕現ではなく誕生を祝う日、クリスマスが**12**月**25**日に定められます。イエス・キリストがまことの光、義の太陽であることから、冬至に合わせて定められました。これが**4**世紀の始めのことです。カトリックとプロテスタント、オーソドックスではコンスタンチノーブル、アレクサンドリア、ギリシャなどの正教会が**12**月**25**日のクリスマス进行祝います。一方、同じ正教会でも、エルサレム、ロシア、ポーランドなどでは**1**月**6**日の公現日进行祝います。日本の正教会はロシア系ですから**1**月**6**日にエピファニー进行祝っています。**12**月**25**日から**1**月**6**日までをキリストの誕生と顕現进行祝う期間として玄関にクリスマス・クランツを掛けています。

クリスマスの文化として、サンタクロース、プレゼント、クリスマスツリー、クリスマスキャロルやコンサートなどがあり、喜ばしく過ごすのは良いことです。そのときキリストの誕生を自分のための恵みとして受け止める、これが最も大切なことです。今日はこのこととお話ししたいと思います。

### 1、皇帝アウグストゥス（1～5 節）

1～2 節「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。」

皇帝アウグストゥスの治世は、紀元前**27**年から紀元**14**年。彼の時代にロー

マ帝国は、パックス・ロマーナ（ローマの平和）と呼ばれる支配を実現します。アウグストゥスの配下でシリアを治めたのはキリニウス（クレニオ）でした。ユダヤの歴史家ヨセフスによるとキリニウスの住民登録は紀元6年のこととされます。ルカはこれを知っていて、その時のことを使徒5章37節に記しています。

ここに記された住民登録については、キリスト教の歴史家ルカだけがこれを記しています。ルカは「すべてのことを初めから綿密に調べて」これを書いています。史実としての年を記し、ローマ帝国が世界を制覇した時代に「ローマの平和」と対比される「神の平和」を記すのです。

3～5節「人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。」

ローマの平和は、帝国の属州からの収奪で成立っており、人口調査はその収奪のためになされました。3～5節には、帝国の支配に抑圧される民の姿が描かれているのです。ヨセフとマリアはそんな帝国の支配に翻弄される貧しい夫婦として登場するのです。

## 2、飼葉桶のキリスト（6～7節）

6～7節「ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」

ヨセフとマリアの村ナザレからベツレヘムまで、直線距離で120キロほどです。市川から熱海くらいです。身重のマリアとの旅は、それ自体大変なリスクの伴う、試練と言ってよい旅でした。胎児にとっても非常にリスクの高い旅でした。神が人となって来てくださったということはこういうことでした。

7節の記事は、4つの福音書の中でルカだけが記しています。マリアがどこでイエスを産んだのかはわかりません。「その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」という記述から家畜小屋が推定されるわけですが、定かなことは分かりません。

続く箇所には野宿する羊飼いの記事があります。これが誕生の季節にふれる唯一の記述です。ユダヤで遊牧民が野宿できるのは春から秋です。キリストの誕生は冬以外の季節だったと考えられますので、布にくるんで飼葉桶に寝かせた子が、寒さに凍えることはなかったと思われます。

ルカが綿密に調べて確かに記したことは、「宿屋には彼らのいる場所がなかったのも、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた」ということだけです。

「宿屋」はカタリマ、これは客間という意味です。旅館や旅籠が満員でということではなく、旅人と客人として迎えてくれる人がいなかったということです。

飼葉桶がどのような形であったかわかりませんが、牛やロバが秣を食べる器ですから、赤ちゃんを寝かせるには十分な大きさだったのでしょう。ヨセフとマリアは野宿だったのかもしれませんが、せめて赤ちゃんを飼葉桶に寝かせたのではないのでしょうか。これは想像ですが、ルカの記述から確かに言えることは、カタリマ（客間）ではなく飼葉桶だったということです。ヨハネの福音書 1 章 11 節には「この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった」とあります。

### 3、「しるし」としての飼葉桶のキリスト

少し後の 11～12 節で、野宿していた羊飼いに御使いがこう告げます。

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

王宮に生れたみどりごがしるしであると言うのならわかり易いことです。しかし、キリストはその対極と言ってよい飼葉桶に寝かされました。客間にいるみどりごの中からキリストを探すのではなく、飼葉桶に寝かされたみどりごがしるしなのです。

ルカの福音書 3 章には、アダムから神にまで遡るヨセフの系図が記されています。また、マタイの福音書の冒頭にはアブラハムから始まってマリアに至る系図が記されています。主イエスの誕生は、マタイの系図ではユダヤの全歴史が待ち望んだ、ルカの系図では人類の歴史が待ち望んだみどりごの誕生です。

マタイの系図はアブラハムから始まります。高齢のアブラハムに生れた約束の子がイサクでした。イサクから海の砂、空の星のように増え広がる子孫の中に生れたみどりごは、飼葉桶に寝かされたのです。

ダビデの曾祖父ボアズの母は遊女ラハブでした。ダビデの王位を継いだのはバテシェバの子ソロモンでした。系図は神のあわれみによってつながります。イスラエル王国は分裂し、ユダ王国も滅びました。バビロン捕囚という神のさばきを経て系図は続き、待ちに待ったみどりごが飼葉桶に寝かされたのです。しかも、マタイの福音書によれば、ヘロデはこの子をなき者にしようと同じ頃

生まれた男の子を殺しまくり、ヨセフの家族はエジプトに避難したのです。  
イエスは難民の子として来られたのです。

マタイ 7 章 13～14 節「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。」「飼葉桶のキリスト」を見出した方は幸いです。

おわりに

キリストは光である、義の太陽であるということをお話ししました。イザヤは預言して言いました。「闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く」(9 章 2 節)

ヨハネの福音書 1 章 4～5 節にはこうあります。「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」(1 章 4～5 節)

私たちの罪を照らし、私たちの闇を払うお方は、光輝く姿ではなく、飼葉桶に眠るキリストとして来てくださったので。特権階級の、一部の特別の人のためではなく、生きとし生ける者を、一人残らずお救い下さる方として来てくださったのです。

飼葉桶の汚れは私たちの罪を象徴しています。飼葉桶の貧しさは私たちの魂のありさまを表しています。そこをめがけて来てくださったキリストを、信仰を持ってお迎えしましょう。

この世界は、昔も今も「飼葉桶のキリスト」に気づかないようです。アメリカの教会には飼葉桶のキリストを迎える信仰の方が多くおられます。しかし、アメリカの政治と結びついたキリスト教を見ると、飼葉桶のキリストを見失っているのではないかと思われてなりません。ジェノサイドのガザの瓦礫の中で悲しみの中にある人たちを忘れたクリスマスはあり得ないと思います。ジェノサイドを支持するようなキリスト教はヘロデの所業に近いと言えるでしょう。

昔も今も飼葉桶のキリストを迎える者は多くはないのです。「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。」「飼葉桶のキリスト」を見出した方は幸いです。」

今日、私たちは飼葉桶のキリストを見出しましょう。罪人の私をめがけて来てくださったキリストを喜びをもってお迎えしましょう。